

ホームステイを通じた高校生の異文化認知

小池浩子 言語教育講座

1 はじめに

短期の海外生活を経験した高校生が、異文化をどのように感じ取ったかを分析する。これまで、異文化体験全般に関して、学校文化の体験を通じた異文化の捉え方について分析を行ってきた（小池, 2001a, 2001b）が、本稿では、ホームステイを通じたホストファミリーとの交流からどのような異文化認知がなされたか、異文化に対してどのような点に心を動かされたのかに焦点を当てて分析し、報告する。分析の対象となった国際交流プログラムは、ある都道府県の外郭団体が主催したもので、選抜された日本人高校生を世界の5つの地域に派遣し、現地の特定生徒とパートナーシップを組み合わせることによって、その生徒や友人との交流、その生徒の家庭での生活、学校生活等を通じて異文化を体験させたものである。

2 交流事業の概要

当該交流事業の概要については、先行の2論（小池, 2001a, 2001b）と共通であるが、必要上ここに再度記載することにする。交流事業の主体は、ある都道府県の国際交流に関わる外郭団体である。姉妹県・州・都市の中からベルリン市（ドイツ）、ニュー・サウス・ウェールズ州（オーストラリア）、北京市（中華人民共和国）、ソウル特別市（大韓民国）、カイロ県（エジプト）の5地域と相互受入、交流を行っている。それぞれの自治体には公募によって選定された日本人の高校生が6人ずつ派遣された。そして翌年には相手方自治体から、日本人の高校生のパートナーとなった生徒を日本に受け入れ、相互交流を実施している。

事前研修

事前研修は、1泊2日の日程で、派遣の1ヶ月ないし2ヶ月前に行われた。派遣先によって出発日が異なるが、研修は合同で行われたのである。その内容は、ビザの取得、海外旅行保険などの実務的な説明、派遣先の文化・生活事情等の講義（派遣先自治体の事情に詳しい職員と派遣者OBによる）、派遣先で学ぶことや言語学習などに関するグループ討議、歓迎会等の出し物についての準備、そして異文化との接触についての学習（講義と体験学習）である。このように、この事前研修は海外渡航に必要な実務的な内容と、渡航先の文化について具体的に学ぶ「文化特定」の学習、それに異文化接触でどのような心の準備が必要かを考える「文化一般」的学習の3つの内容が組み込まれたプログラムである。派遣直前に行われるプログラムではこのような「文化一般」の学習が行われることは比較的困難、あるいは受講者の興味がそれとも言われるが（Hammer, Gudykusnt, & Wiseman, 1978）、筆者の観察によると、この研修では大多数の受講者の熱心な参加が見られた。また、OBの経験談や言葉の学習はもっと増やしてほしいとの要望が出された。この2点は帰国後の報告会でも確認されたものである。

交流プログラムの内容

ベルリン市（ドイツ）、ニュー・サウス・ウェールズ州（以下、NSWと記載）（オーストラリア）、

北京市（中華人民共和国）、ソウル特別市（大韓民国）、カイロ県（エジプト）の5地域にそれぞれ6人の日本人高校生と派遣主体の国際交流財団職員が派遣された。派遣期間は2週間である。派遣生には各自現地の同世代の生徒がパートナーとして選定され、日本人高校生は派遣期間中の多くの時間をそのパートナーと供に過ごすと共に、その生徒の家庭にホームステイし、家族との交流も行われた。週末をその家族らと過ごす機会も与えられた。派遣期間中の数日はそのパートナーが通う高等学校相当の学校に通学し、授業に参加した。通学の日数は派遣先によって異なる。これは受入先の諸事情と言語の問題などのためである。ソウルと北京は4日間、ベルリンは5日間、ニュー・サウスウェールズ州は8日間である。また、事業主体の団体の主宰する、市内見学及び近郊への観光も組み込まれた。学校通学の日程の少ない派遣先では代わりにこの比重が高くなった。

この交流プログラムで計画された高校生の体験学習は以下の点にまとめられる。a. 同世代の若者との対人コミュニケーション、b. 同世代の若者を持つ家族の家庭生活の経験、c. 現地の学校への通学経験、d. 学校内外での同世代の複数の若者とのコミュニケーション経験、e. 派遣市内と周辺の名所等の見学、の5点である。

3 研究方法

調査対象者

本調査の対象は国際交流のために世界の5地域に派遣された日本人高校生30人である。有効回答者数は29人。その派遣先の内訳は、ソウル特別市：5人、北京市：6人、カイロ県：6人、ニュー・サウス・ウェールズ州：6人、ベルリン市：6人である。ソウル特別市に派遣された1名からは都合により協力が得られなかった。

調査方法

帰国後に実施された報告会において、質問紙調査を行った。質問は、派遣全般について、学校について、現地の友人関係について、家庭についてに分けられている。今回の分析はこのうちホストファミリーとの生活についてが対象である。質問項目には、どのような文化の違いを認知し、反応したかを問うものと、どのようなことがらに心を動かされたか（情動面）を問うものが含まれている。家庭文化の違いの認知面を問うために、a. 日本の家庭と違うなあと思ったことはどんな点か、という質問をした。情動面を問う質問項目は、b. 日本の家庭と比べて好ましいと思ったことは何か、c. ホストファミリーとの生活で困った（いやだった）ことはどんなことか、の2点である。肯定的方向に心を動かされたできごとと否定的な方向に心が動いたできごとの両面を把握しようとしたものである。なお、質問はすべて自由回答式の設問である。

分析方法

自由記述式の設問であり、複数の内容について答える回答者が多かったことから、回答数に制限を設けない複数回答として分析した。各自の回答は内容分析手法を用いてコード分類された。内容分析の手法としてはBabbie(1983)とBackstrom & Hursh-César(1981)それにクリッペンドルフ(1992)の自由記述式調査の分析法を参考にした。分析単位は言及単位、つまり「指示対象となっている特定の事物、事象、人物、行為、国、あるいは思想」（クリッペンドルフ、1992）などとした。さらに、細分化されたコードを上位カテゴリーにまとめた。その後、同一コードの回答がどれほどあるか、その割合を有効回答者数を母数にして求めた。

4 調査結果

違いを感じたこと

海外でのホームステイを体験した日本人生徒が、現地の家庭生活のどのような点を日本の家庭と違うと感じたかを分析した。表1は、その主な結果である。それによると、(1) 食事の習慣について、(2) 家族関係について、(3) 親の子供に対する扱い方について、(4) 家族で過ごす時間の長さについて、(5) 風呂やトイレなど家の機能について、それに(6) 時間の使い方についてなどに文化の違いを感じずるケースが多かった。

表1 文化の違いに関する認知

内容	N=29	
	人数	割合
食事の習慣	12	41.4%
家族関係	7	24.1%
子供の扱い	7	24.1%
家族で過ごす時間	5	17.2%
風呂・トイレ	5	17.2%
時間の使い方	4	13.8%
家	2	6.9%
家事分担	2	6.9%
自分の扱われ方	2	6.9%
その他	7	24.1%
なし	2	6.9%
計	55	189.7%

このうち、最も違いが認知されやすかったのは食事の習慣に関してであった。41.4%の人がこれに言及していた。自由回答の内容を見ると、食事の内容と方法に関する言及が多く見られる（それぞれ13.8%）。食事の内容については例えば次のようなコメントがあった。なお、高校生のコメントはできるだけ記述された言いまわしを忠実に再現しているが、一部分かりやすさや匿名性の維持のために変更している。

「ご飯が適当。夜ご飯でもハンバーガーだったり冷凍ピザだったり」(NSW 派遣生)

「毎日ほぼ同じメニューである」(ベルリン派遣生)

「料理が一皿」(ベルリン派遣生)

これらはいずれもベルリンとニューサウスウェールズの家家庭にホームステイした生徒の回答であるが、日本の家庭料理と比較してその内容が豊富でないことを挙げている。

また、食事の方法についてのコメントには次のようなものが見られた。

「朝食、夕食は食卓で取らず、各自が部屋で食べること」(カイロ派遣生)

「食事の方法（左手を使わないこと）」(ソウル派遣生)

「食事をだまってること」(ソウル派遣生)

これらは、カイロとソウルを経験した生徒のコメントであるが、特にソウルに行った生徒が食事方法について違いを感じていた。韓国と日本は文化的共通点が多いと言われることが多いが、食事習慣には違いが大きいところがあるようである。

食事の習慣に次いで多くの生徒が違いを認知したのは「家族関係」に関する領域であった。24.1%がこの内容に言及していた。家族関係に分類された内容には、家族の仲がよいこと、お互いが協力的であること、絆を重視していることなど、家族のつながりの深さを感じたというものが多数であった。

(10.3%)。また、家族の間でコミュニケーションが多いことが日本との違いであると述べるものが6.9%見られた。家族関係について代表的な回答を紹介すると、次のようなものがある。

「家族の絆を強く感じた。生活の中で、お互いが本当に信頼しあい、協力しているのがよくわかった」(北京派遣生)

「毎晩一緒に夕食を食べる、よく話をするなど、家族のつながりが深く、家庭をすごく重視している」(ベルリン派遣生)

「家族同士で話し合うことが多かった」(カイロ派遣生)

家族関係と同様に24.1%の生徒が「親の子供に対する扱い方」に文化の違いを感じていた。親からの自立期にある高校生が注目しやすいポイントだと思われる。

「子供がほとんど全く家事を手伝わないこと」(ソウル派遣生)

というように、子供が家の手伝いをしないことが日本と違うと述べるもの(6.9%)や、

「子どもを干渉しない。自立した存在として扱っている」(北京派遣生)

と、親が子供に干渉しないことを挙げたもの(6.9%)などがあった。親の子供に対する扱いについてに言及したのは、ほとんど北京とソウルへの派遣生だった。NSW派遣生が1人、「親と子の立場がはっきりしている(親の威厳がある)」と、親が厳しいと述べている。

違いが認知された領域の4番目は、「家族で過ごす時間」についてであった。17.2%の生徒の回答がこの内容であった。

「みんなそろって夕ご飯を食べる」(カイロ派遣生)

「両親の帰りが子供より早い」(北京派遣生)

「家族と一緒にいる時間が長い(例えば、毎日必ず全員で夕ご飯を食べている)」(ベルリン派遣生)

日本の家庭と違うところとして、両親そろって在宅する時間が長く、家族揃って食事をする、と世界各地への派遣生が述べている。

風呂やトイレについても同じく17.2%の人から違いが感じられたと報告があった。具体的な回答は次のようなものである。

「お風呂はシャワーのみで朝入る」(NSW派遣生)

「トイレに鍵がない」(NSW派遣生)

「長屋で、トイレが遠かった」(北京派遣生)

このように、朝シャワーを浴びる欧米などの習慣やトイレの構造などが違いとして注目されたようである。

また、13.8%は、時間の使い方が日本と異なると述べている。

「朝起きるのも夜寝るのも早い」(北京派遣生)

「時間の使い方：朝は余裕を持って起き、朝食後出かけるまで1時間ほどある。帰ってくるとおやつを食べてどこかへ出かける。9時ごろ寝る」(NSW派遣生)

「ゆとりの時間が多い」(ベルリン派遣生)

このように、日本の家庭と比べて起床と就寝時間が早いことと、時間に余裕を持って生活していることに注目している。

以上が違いを感じたと報告のあった主な点であるが、この他には、家の構造についてや、家族全員あるいは父母の家事分担が成されていることなどに関する言及が見られた。

好ましいと感じたこと

次に、海外の家庭を経験した高校生は、どのような点を好ましいと感じたのであろうか。表2はその質問に対する自由回答の結果を分析し、まとめたものである。好感を持って捉えられたのは、

(1) 家族関係、(2) 家族で過ごす時間、(3) 家について、(4) 食事の習慣、(5) ホストファミリーの自分に対する扱いなどであった。

このうち、最も肯定的に感じる高校生が多かったのは「家族関係」である。31.0%の回答者がこのことに触れていた。文化の違いについての質問でも、この点は2番目に多くの人が変わいを感じると述べていたところである。さらに詳しく見ると、家族関係が好ましいとする回答には、家族の仲がよいことや、祖父母や親戚を含めてよい関係を築いていること、それに、オープンでコミュニケーションが緊密であることの3つの内容が含まれていた。

それぞれ1つずつ回答例を挙げることにする。

「祖父母・親戚を大事にすること」(カイロ派遣生)

「見かけの豊かさにかかわらずに、家族の中に豊かさを持っている。ホストファミリーは複雑な血縁関係だったが、仲が良かった」(ベルリン派遣生)

「とてもオープンで、誰とでも何でも話すこと」(カイロ派遣生)

次に好意的に捉える人が多かったのは、「家族で過ごす時間」についてである。24.1%の高校生が、これを挙げていた。この分類の回答は全部共通して、家族で過ごす時間が日本に比べて長いことであった。具体的には次のように述べている。

「食事は家族そろってとり、テレビなどを一緒に見る団欒の時間があること」(NSW派遣生)

「働いている両親が3時ごろには帰宅して、2人揃って昼食を準備するところ(勤務時間は短く、

表2 家庭文化で好ましいと感じたことから

N=29

内容	人数	割合
家族関係	9	31.0%
家族で過ごす時間	7	24.1%
家	5	17.2%
食事	4	13.8%
自分に対する扱い	3	10.3%
暮らし方	2	6.9%
その他	6	20.7%
なし	3	10.3%
計.	39	134.5%

ランチは遅いので)」(カイロ派遣生)

「いつも家族そろって夕食をとること。両親は働きに出ていたが、夕方になると帰ってきて、二人で協力して食事の支度をして、みんなで食卓を囲んだ。料理もとにかくおいしかった。」(北京派遣生)

「家族と過ごす時間をとても大切にしている」(ベルリン派遣生)

このように、派遣されたほとんどの都市からの報告に、家族と過ごす時間が長いこと、そしてそれが高校生にとって好意的に感じられていることが見られた。

3番目に好ましいとされたのは、「家」に関することであった。建築物としての家である。17.2%の派遣生が、ホストファミリーの家を日本と比べてよいと感じた。そのほとんどは、「家が広いこと」である。NSW、カイロ、ベルリン派遣生が全く同一の感想を持っていた。ソウル派遣生は「冬の間ずっと(寒くなると)家全体が暖かい」と述べている。韓国独特の床暖房設備(オンドル)の優秀さを実感したものであろう。

また13.8%は「食事」について触れているが、全員が一貫して同じことを述べている。それは「食事おいしい」ということである。ソウル、北京、ベルリン派遣生にこの回答が見られた。

この他、外国人である自分に対しての扱いに好感を持った派遣生が10.3%あった。

「けっこう自由にさせてくれたこと」(北京派遣生)

「異国の人間に対してものすごく親切」(NSW派遣生)

「お客様気分」(ソウル派遣生)

このように様々な理由から成り立っている。

困難を感じたことがら

さて、ホストファミリーとの生活の中で、高校生はどのような文化の違いに困難を感じたのであろうか。表3はその主な内容を分析した結果である。否定的に感じたのは(1)風呂・トイレ、(2)言葉の問題、(3)食事に関して、などであった。困難を感じなかった人も27.6%と、かなりの比重を占めていることがわかる。各領域について、具体的な回答を含めてその内容を紹介する。

最も困難だと回答した生徒が多かったのは風呂・トイレにまつわることがらである。34.5%の生徒がホストファミリーのバスルームが日本に比べて使いにくいと感じていた。実際の声を拾ってみる。

表3 家庭文化で困難を感じたことがら

N=29		
内容	人数	割合
風呂・トイレ	10	34.5%
ことば	7	24.1%
食事	4	13.8%
時間の使い方	2	6.9%
他	5	17.2%
なし	8	27.6%
計	36	124.1%

「お風呂にシャワーがなかったこと」(湯船しかなかった)(NSW派遣生)

「お風呂がユニットバスだったこと(風呂好きな私には少しつらかった)」(ソウル派遣生)

「お風呂がなくシャワーだけだった。狭い空間にトイレ、洗面台、シャワーが一緒になっていて、カーテンなどもなかったので使いづらく、毎日大変だった。」(北京派遣生)

このように、各地で風呂が大きな問題であった人が多いことがわかる。この他、この項目の中には、風呂（シャワー）の温度が低すぎて困ったこと（カイロ）や、トイレが遠くて困った（北京）という内容が見られた。

2 番目に困難を感じる生徒が多かったのは言葉の問題である（24.1%）。英語や現地語で自分がうまく言いたいことが表現できなかったという内容や、相手の言っていることが分からなくて困った、というものが多かった。

「家族の会話がいまいちわからなかったり、私のために沈黙が訪れたりすること」（NSW 派遣生）
「言語上会話に困った。まあこれは自分の学力がないのだから仕方がない。もっと現地語を覚えたい」（ソウル派遣生）

言葉に関してはこの他に、多言語圏のカイロ派遣生から、「何語を話しているのか、注意していないと分からなくなる」というコメントもあった。

食事に関しては、良いと感じる人も多かった反面、困難を覚える高校生も比較的多く見られた。

「朝食がなく昼食が遅いので自分のリズムが少し崩れた」（ベルリン派遣生）
「野菜がない！食事がいいかげんというのもまあいいとして、やさいがもっとあってもいい。肉ばかり食べている。」（NSW 派遣生）
「朝食の内容が毎日ほぼ同じだったこと」（カイロ派遣生）

日本の多様性を持った食事と異なり単調な内容であったり、食事のリズムが異なることを否定的に感じる人が多いようである。

5 考察

異なる文化の家庭生活に触れた高校生達は、衣食住よりもむしろ「家族の人間関係」に最も注目していた。日本との違いを問われたときに、「家族の仲のよさ」と「家族で過ごす時間の長さ」、それに「子供の扱い」に関してなど、家族の関係にまつわる回答をする人が際立っていた。このことは、裏返せば比較対象の日本の家族がそれだけばらばらな生活をしているということではなかろうか。少なくともこれらの回答を寄せた高校生の家庭やその周辺ではどうやらそうらしい。様々な家庭文化の中で高校生らが好ましく感じたのは、やはり「家族の人間関係」であった。「仲のよい家族関係」と「家族で過ごす時間が長いこと」である。「日本の家庭と比べて良いなあ、と思ったことは？」という設問に対する答えであるので、回答した高校生らは、日本の家庭にもこのような家族関係を欲していると言えるのではないだろうか。異文化の捉え方を調査する目的であったが、はからずも自文化への期待を導き出す結果になったようである。

食事の内容や方法にはかなり関心を寄せている。食事は生活の重要な部分であることからくるものであろう。それにしてもメニューが単純だとか、夕飯もファーストフードだというようなコメントを見ると、改めて日本の食生活の豊かさを知らされる。あるいはバラエティーに富んだ、手をかけた健全な食生活をしている現れと表現した方が適切であろうか。良いと感じる事柄についての設問でも食事に関する答えがある程度のまとまりで見られた。よきにつけ悪しきにつけ食事は気になるところと

いったところか。

住環境の問題で高校生が違いを感じたのは、バスルームに関する事柄である。これは否定的な意味での回答が大多数である。バスルームの構造が使いにくい、バスタブやシャワーがないなど、風呂好きの日本人には大きな問題と言えよう。

時間については食事やバスルームとは反対に肯定的な反応であり、日本人の余裕のない時間の使い方を指摘されているかのようである。ただし、高校生達は、主に「違い」の質問で時間の使い方の違いに触れており、好ましいとか困難だと評価を加えたのは少数派であった。

言葉が通じにくいという点は日本人の異文化交流において必ずと言ってよいほど取り上げられる問題である。この交流プログラム全体についてのまとめでも(小池, 2001a), 学校文化の経験についての分析でも(小池, 2001b) 困難を感じるものがらのトップは「言葉」が通じにくいという点であった。日本への留学生とホストファミリーについて研究した佐々木と木村(1996)は、留学生からは「不快に感じる時」「誤解されたこと」「実行するのが困難な行動」などの設問に対してかなりの高率で「言語コミュニケーション」に相当する内容が出てくることを報告している。しかし、佐々木らは、「ホストファミリー側は、留学生の語学力の不足のために誤解を生じたことはあるとするものの、ほとんど気にしていないことがわかる(p. 41)と述べ、留学生の言語習得に対する期待が高いことや、言いたいことがうまく言えない不満が表れているのではないかと考察している。

全体をまとめると、2.3 週間のホームステイの経験からは、特に「食」と「家庭内の人間関係」、それに「住環境」と「時間の使い方」の違いが認知されやすかった。また、文化の違いのうち肯定的に捉えられたのは、「家庭内の人間関係」と「住環境(家の広さ)」それに「食事」であり、否定的に捉えられたのは、「住環境(バスルーム)」、「言葉」、それに「食事」であった。

この短期国際交流プログラムで、ホームステイは果してどれほど意味があったのであろうか。これまで自分が育ってきた環境とは異なる文化に触れ、自文化を見つめ直すと共に、自分がこれから生きていく上で取るべき行動や考えか他の選択肢を広げることにつながったのであろうか。これに関係して、田淵(1993)は以下のように述べている

いうまでもなく、異文化理解教育は、異文化についての知識や概念を与えるものではない異文化を持つ人々への暖かい理解や、彼らと交流し共存できる態度や技能を育成するものである。その具体的方法として、異文化を直接体験するホームステイが効果的な手段ではないかと筆者は考えている。なぜなら、そのような温かい態度や実践的資質は、頭で認知的に学習するものではなく、学習者が人間と人間の直接交流を通して共感的に獲得していくものだからである。

その意味で、一般家庭に入り、衣・食・住の日常生活を共にするホームステイは、生活の背後にある文化(価値観や生活充実感)---人々が何に時間やお金を費やし、何を愛し何に喜びや悲しみを感じているのか---を知りうる最良の方法であろう(p. 77)。

派遣生が最も考えさせられたのは、家庭内の絆や仲のよさ、それに家族で過ごす時間を多く取ることなどであろう。また、言葉に関しては、これまでも多くの指摘がなされてきたように、自分の語力の不足を痛感したものは、それを動機にして今後言語の学習に励むであろう。

このプログラムでは、これ以外には人々の「考え方」の側面があまり感じ取られなかったようである。全くなかったわけではないが、少数であった。異文化の人々の「考え方」に触れた回答例は以下のようなものである。ベルリン派遣生の1人がこのように述べている。

「質素な生活をしていること。無駄な物がなく、必要なものだけで生活していた。(部屋の中の照明は電気スタンドだけ、食事は2〜3品、洋服は2〜3枚を着まわす、など、何もかもが質素な生活に思えた)」「ごみが少ない」

また、カイロ派遣生の1人は「何をするにもよく吟味していて暮らし方に無駄がない。質素。無駄買、無駄使いをしない。必要最低限の家具しかない」と無駄を出さない生活について言及している。

このような、人々の暮らしに対する考え方などのコメントは他の生徒からは聞こえて来なかった。これにはいくつかの理由が考えられる。一つは、言葉の障害である。言葉がよく分からないため、人々の考え方にまで触れられなかった可能性がある。また、異文化接触のほんの初期であったために、文化の表層しかつかむことができなかった可能性もある。アドラー(1975)は、異文化との初期の接触期を、認知面では、文化的差異に興味を持つが、文化の深い違いは認識されないことと特徴付けている。もう1つの可能性は、事前の研修や日ごろの学習で、人々の考え方という側面の文化の違いに触れてこなかったために、その領域についてあまり知識がなかったり注目していない、という可能性である。田淵も指摘するように、異文化との交流において、あるいは個人の人生そのものにおいても、様々な考え方に触れること、そして自分と異なる考え方に出会ったときにその対処法を知っていることは大切であろう。このような交流プログラムでは、このような点にもう少し注目するような事前学習機会を提供する必要があるのではないだろうか。

参考文献

- Adler, P. (1975). The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 15 (4), 13-23.
- Babbie, E. (1983). *The practice of social research (3rd ed.)*. Belmont, CA.: Wadsworth.
- Backstrom, C., & Hursh-Csar, G. (1981). *Survey research (2nd ed.)*. New York: John Wiley & Sons.
- Hammer, M., Gudykunst, W., & Wiseman, R. (1978). Dimensions of intercultural effectiveness. *International Journal of Intercultural Relations*, 2, 382-393.
- クリッペンドルフ, クラウス(1989)「メッセージ分析の技法:『内容分析』への招待」 三上俊治, 椎野信雄, 橋元良明訳. 勁草書房
- 小池浩子 (2001a) 短期国際交流における高校生の異文化認知『信州大学教育学部紀要』103, 105-112.
- 小池浩子 (2001b) 短期国際交流における高校生の異文化認知Ⅱ: 学校文化編『信州大学教育学部紀要』, 104 出版予定
- 佐々木ひとみ・木村周(1996) 留学生とホストファミリーが認知するホームステイにおける適応課題『教育相談研究』34, 31-43.
- 田淵五十生(1993) 異文化教育と体験学習: アメリカでの教育実習とホームステイの事例, 渡邊文雄編『現代のエスプリ』229, 69-78, 至文堂

(2001年12月17日 受理)